

批評3 日米交流のあけぼの——黒船きたる——展

沓澤 宣賢*

会場：東京都江戸東京博物館

会期：平成11年9月28日（火）～12月12日（日） 66日間

主催：東京都・東京都江戸東京博物館・ピーボディ・エセックス博物館・朝日新聞社

入場者数：92,689名

担当者：小林淳一（江戸東京博物館）

ピーター＝フェチコ・ウィリアム＝サージャント・ディーン＝ラヒカイネン・ダニエル＝フィネモア（以上、ピーボディ・エセックス博物館）

1 はじめに

今回の江戸東京博物館の企画展「日米交流のあけぼの——黒船きたる——」は、この企画をした当館の学芸員小林淳一氏の調査・研究の成果が十分に示された展示である、ということが出来る。小林氏は平成8年（1996）の「シーボルト父子のみた日本」展にスタッフの一人として関わり、その際、シーボルトの日本研究に協力した日本人画家・川原慶賀の「人物画帳」をドイツのミュンヘン国立民族学博物館で発見した。そして、この画帳に収められた人物画がシーボルトの著書『日本』にどのような形で用いられているのかを明らかにしたのである¹⁾。このことを契機に、氏は海外にある日本コレクションの調査・研究を本格的に行うことを志し、研究テーマであるE＝モースのコレクションが数多く収められているアメリカ合衆国セイラムのピーボディ・エセックス博物館で、1年間にわたってそれに従事した。ここで氏があらたに発見した資料を中心にして、またピーボディ・エセックス博物館の創立200年の記念としてこの展覧会が企画されたのである。また、本展覧会では博物館としては当然のことであるが、モノに重点を置いた内容となっている。文献などの謂ゆる史料はできるだけ限定し、様々なモノによりながら日米交流がどのようにしてなされたかが示されている。以下、いくつかのコーナーに分かれた展示の内容について、興味深かった点や気が付いたことを述べたいと思う。

2 展示内容について

(1) 「西洋とのであい——ポルトガルとオランダ——」

このコーナーでは日本とアメリカが出会う以前、ヨーロッパのポルトガルやオランダへどのようなモノが貿易品として日本から輸出されたのか、日本人がこれらヨーロッパ人達をどのようにとらえていたのか、これらの点について陶磁器や漆器それに屏風や絵画資料などによりな

* 東海大学文明研究所 教授

が示されている。これまでに行われた、日本とポルトガルやオランダとの交流を示す展覧会に出品されたものと同じ様なものが出品されていたが、これらがアメリカの博物館の所蔵であることには驚いた。博物館がこれらを購入したのは近年のこのようであるが、見覚えのある書見台や望遠鏡、それに大皿など、これまで全てヨーロッパの博物館所蔵のものとしてみてきていたものが、アメリカの博物館にも存在しているのである。特に、金蒔絵のものとして今回展示されたドッガーバング海戦図の絵額（1-34）と西洋人物肖像メダル（1-35、36）は、同じようなものが昭和63年（1988）の日蘭修好380年の「シーボルトと日本」展にアムステルダム国立博物館所蔵のものが出品されている²⁾（ ）内の数字は、本企画展図録に掲載された図版番号を示す。このことから、いかに多くこうした工芸品が我が国で製作され鎖国時代に輸出されたかが伺われ、その意味でこの展示は興味深かった。また、オランダ人が使用した素焼きの陶器のクレーパイプを入れるためのものとして、同じく金蒔絵のケース（1-11）が展示されたが、こうしたものがあることは今回初めて知った。オランダに渡った日本の陶磁器に蓋や蛇口が取り付けられているのはこれまでも目にしていたが、オランダ人の使用するパイプのケースを日本人が伝統工芸技術を用いて製作していたことも興味深かった点である。

(2) 「海運都市セーラム——その黄金時代——」

ここでは、19世紀のセーラムの様子やここで生活していた人々の日用品に混って、この頃海外から持たされた品々が展示されている。オランダの連合東インド会社が、ナポレオン戦争による本国の混乱から、一時期アメリカやデンマークの傭船を使用したことは知られている³⁾が、そのアメリカ船がどのようなものを本国にもたらしていたのか、その実態はこれまで必ずしも明らかではなかった。それが今度の展示で具体的に示されたのである。このコーナーでは、享和元年（1801）、マーガレット号が長崎に立寄った際入手したとされるチルトトップ型テーブル（2-9）が示された。こうした説明がついているのは、そのことを示す資料があったからと考えられるが、それが何であるのか後で明記されているが（本企画展図録62頁）、ここには示されていない。今後の研究の手掛りにもなる重要な点であるので、その出典をここで明記した方がよかったと思う。他にも、中国製磁器とされる壺（2-17）が展示されているが、これについても分かっているのであればどの船がもたらしたものであるのか、その経緯を知りたい所である。

(3) 「アメリカ船、長崎に入港す」

このコーナーでは、前の展示に引き続きアメリカ船が傭船としてオランダに用いられた時代にセーラムにもたらされた日本の浮世絵・漆器・雑貨品などが展示されている。その最初に盆（3-1）が示されているが、これは異文化を理解することの難しさを示した例として興味深かった。それは、盆の中央に、アメリカの紋章であるアメリカン・イーグル（白頭鷲）を描く

べき所が、鳩になっているという所である。アメリカ人の依頼に応じて、日本人の職人が製作したものと考えられるが、日本人にはアメリカ人から下絵として示された鷺の絵がよく伝わらなかったものと思われる。これと似たような例は、オランダで製作された徳川家の紋所である葵についても言える。このことについては、小林氏との雑談の折に話題となり、氏もその著書の中で紹介されているが⁴⁾、江差沖に沈んだ幕府軍艦開陽丸から引き上げられた葵の紋所が葵ではなく、ハートの組み合わせになっているのである。鎖国下の日本と、ヨーロッパの国としては唯一関わりを持っていたオランダですらそうであるということを見ると、こうした誤解はしかたのなかったことかもしれない。次に、寛政11年(1799)長崎に入港したフランクリン号が日本で受け取ったとされる雑貨リスト(3-4)が示され簡単に解説がされているが、ここはできれば全訳がほしかった所である。即ち、どのような品物をどれぐらい日本から持ち出しているのか、この点は気になる所だからである。日蘭貿易史の研究ではこの分野について蓄積が十分あるので⁵⁾、そうしたものを参考にしながら全訳があるとよりよかったと思う。この後日本からの持ちかえり品の具体例として棹銅(3-3)が示されているが、これは長崎県立図書館郷土史料室にあるような長いものではなく短く切られた形になっている。おそらく箱詰めされる際にこうした短い形に切られたものと考えられ、これはそうしたことを示す資料としても貴重なものであると思う。

日本の工芸技術の高さを示すものとしてここには多くのものが展示されているが、そうした中で毛植え人形のカワソウ(3-24)は注目される。「シーボルト父子のみた日本」展にも動物や果菜のおもちゃが示されていたが⁶⁾、この毛植え人形もそうしたおもちゃの一つと考えられる。しかも、こうした同じようなものをシーボルトだけでなくアメリカ人も本国に持ちかえていることから、外国人の日本に対する関心事には共通性がみられるということが言えるのではなからうか。来航アメリカ船に関わる文献として、寛政12年(1800)入港のマサチューセッツ号に船長付書記として乗り込んでいたW＝クリーブランドの日記(3-31)が示されているが、日記の内容についての紹介があまりないのは残念な所である。この日記は、昭和56年(1981)横浜の開港資料館で「ペリー提督展」が開かれた際にも展示されており⁷⁾、今回で2回目である。しかし、この間この日記について筆者の知る限りまとまった研究は行われていない。そこで提言であるが、この際許可を得て日記の全部を写真に撮り、今後日米の研究者に解説分析してもらってはどうか。この展示が契機となり、あらたな研究が生まれることを期待したいと思う。

他に、これまでの日蘭交流の展示会では見たことのなかったものに、ナイフ入れ(3-42、43、44)がある。同じような形のもので筆者がこれまでみたことがあるのは、葉籠入れとして使用されたものである。これについて、内部の仕切りを別のものに替えればナイフ入れだけではなく、別のものを入れるケースとして使用することができたのではなからうか。「シーボルトと日本」展で示された彼が所持していた葉籠入れも⁸⁾もとはナイフ入れで、内部の仕切りを替え

て薬籠入れとして使用した可能性もあると思うがいかがであろうか。盆に描かれた出島図(3-45)も興味深かった。1802年にマーガレット号のS=ダービー船長が、ピーボディ・エセックス博物館に収めたこの出島図絵入りの盆についてその存在を初めて紹介したのは金井圓氏であるが、その名称が英語で記されている点は注目される。この英語の文字が日本で書かれたものか、後にアメリカで書かれたものか明確ではない。しかし形状からみて日本で書かれた可能性が高い。また説明にあるようにアメリカ向けにつくられたものであるとすれば、文化5年(1808)のフェートン号事件を契機とする我が国における英語研究が始まる以前に、こうした形ですでに英語があらわされていたことになる。そうした点で、この英語文字は我が国における英語研究の歴史にとっても重要な意味を持つものということがいえるかと思う。

(4) 「太平洋の捕鯨をめぐる」

ペリーの来航にも関わる日米交流の契機となったアメリカの捕鯨に関するこのコーナーでは、鯨のヒゲや骨それに銚や槍などの道具、それに捕鯨の様子を描いた絵画などが展示されている。今回の展示はモノを中心としているが、これらを集めたのは人であり、人がモノだけではなく情報ももたらしている。そこでこうした展示物に関連して、それに深く関わった人物をとりあげて、人とモノと情報を組み合わせる方法もあったのではなかろうか。例えば、ここでは日米のかけ橋になった日本人漂流民中浜万次郎をとりあげ、彼の翻訳した「亜美理加合衆国航海学書附録率表」(4-34)だけが示されているが、他に万次郎の人物像を紹介しながら彼の漂流体験を記した『満次郎漂流記』(嘉永6年・1853)¹⁰⁾などを示してもよかったように思う。この他、日本人漂流民を日本側に引き渡すため弘化2年(1845)来航したマンハッタン号の様子を描いた外国船絵巻(4-32-1~3)は、日本人がアメリカ人をどうとらえていたのか、そのことを知るができる興味深い資料であると思う。マンハッタン号については、こうした日本側資料だけでなく、M=クーパー船長の談話や日本印象記が「チャイニーズ・レポジトリ」誌に掲載されていることから¹¹⁾、ここも日米両方の資料を示すことにより一つの出来事についての理解がより深められたのではなかろうか。

(5) 「開国という時代」

このコーナーでは、ペリー来航の際ミシシッピー号で印刷された『ジャパン・エクスペディション・プレス』(5-6)や、ポーハタン号のパーサー補佐のT=ダッドレイの日記(5-7)などこれまで知られていない資料が示された。しかし、その中味についての説明が無いのは残念な点である。これに対し、ペリーの書簡(5-26-1)の所では不安を抱えながらも職務を務めようとする彼の心情を部分訳ではあるが示されており、興味深かった。また、ペリーをはじめ艦隊乗組員を描いた日本側の絵画はおしなべて鼻が高く髭が濃く描かれているが、これは実際には外国人をきちんと見ていない日本人の画家が想像をまじえながらかいたものとして、

日本人の外国人観が示されたものにとらえるべきであろう。これに対し、ペリー来航以後にボストンで発行された『バロウ絵入り新聞』（5-34~37）には、日本人や日本の風景が正確に描かれている。しかし、これはアメリカ人がペリー来航を機に日本を正確に認識したということではなく、新聞に掲載された絵の多くはシーボルトの『日本』やティチングの『日本風俗誌』からの引用であることを明らかにした点は注目される。小林氏の研究の成果が示された所である¹²⁾。このようにアメリカでは、ペリー来日以後も図版入り報告書の『ペリー提督日本遠征記』（1856）が出版されるまでは、これ以前に出された他の出版物から日本人や日本情報を引用しているという事実が存在しているのである。なお、同じ『バロウ絵入り新聞』1856年5月3日付の「さまざまなイメージの寺院」（5-38）の原図について、小林氏は講演会の折その出典は不明であるとされていたが、この後筆者が調べた所ではA=モンタヌスの『オランダ東インド会社日本遣使記』所収の図版からの引用であることが判明した¹³⁾。

(6) 「異文化へのめざめ」

ここには、E=モースやW=ビゲローのコレクションが示されているが、これらを見ると鎖国時代に日本からアメリカにもたらされたと同じような陶磁器や漆器がみえており、彼らアメリカ人の持っていた日本に対する関心には大きな変化がなかったことが分かる。この他、明治維新後いち早く来日したC=ロングフェローのコレクションも展示されている。その中で、日本の刺青に興味を持ったこの人物が刺青まで細密に描かれた駕籠かきの人形（6-38）を蒐集しているだけでなく、彼自身横浜で刺青を彫り、しかもその写真（6-41）まで展示されたのには驚いた。この写真はこれまで知られていなかったものようであるが、こうした資料の発掘はアメリカ側の協力があってはじめてできたものと思われる。この他妻ワラ細工のタバコ入れ（6-47）が示されているが、これについてもシーボルトコレクションの中に同じようなものがみえている¹⁴⁾。すでにカワウソの人形の所でも述べたように、外国人の日本のモノに対する関心には共通性がみられるということであり、それは日本独自の伝統的な工芸品に対するものだったことが分かる。そして、これらの展示品の多くが現在の日本ではほとんどみることができなくなってしまったものであることを考えると、今回の展示は我々日本人に対して日本の伝統工芸に対する認識をあらたにさせてくれるものにもなっているのである。

こうした日本の伝統的工芸技術の高さを示すものに、展示の最後にある生き人形（6-86~91）があげられよう。この生き人形についても、シーボルト展の際にオーストリア国立工芸美術館所蔵でシーボルトの次男ハインリッヒ蒐集のものが展示されたが¹⁵⁾、今回のものは等身大で男・女・子供など7体と数も多い。これはE=モースのコレクションということだが、こうしたコレクションの内容からハインリッヒとモースとの間の日本に対する関心に共通性をみることができると思う。生き人形の技術は、現在も多くの人形製作の現場で生かされていると考えられるが、こうした生き人形自体はすでに日本には無くなってしまったものである。そして

この生き人形達は、文献や写真などでは十分に分からないこの当時の日本人の身体的特徴（低い身長・出っ歯・一重マブタなど）を示したものとして、今回の展示の目玉の一つであるということができる。

3 むずびにかえて

これまで述べたように、今回の企画展で展示されたピーボディ・エセックス博物館所蔵の資料の大部分は本邦初公開のものであり、モノを通じて日米交流の跡をふりかえるというテーマにふさわしい内容になっている。この点では十分成功していると思うが、このモノをさらに意味あるものにするためにすでに何度も指摘したように、文献をもう少し加えた方が理解がより深まったのではなかろうか。また、今回示された文献についてはできれば全文訳が、部分訳の場合でも全体の意味がつかめるような説明文があった方がよりよかったように思う。他に、展示物に関する解説については図録を購入すれば分かることであるが、図録を持っていない見学者にとって会場の解説文は字が小さく読みづらいのが気になった。この点は、今回の展示についてのみ言うのではなく、これからの展覧会の際には是非とも心掛けていただければと思う。思いつくまま勝手なことを申し述べたが、今回の企画展が内容的にすぐれた興味深い展示であることは間違いない。この展覧会を関係者は日米交流の跡をふり返るだけでなく、さらに今後の両国の交流のあらたな出発点として位置付けていると思う。この展覧会が契機となり資料についての研究が行われ、その成果がさらに次の企画展につながるようになることを期待したい。なお、この企画に併せて小林氏が執筆した『海を渡った生き人形——ペリー以前以後の日米交流——』（朝日新聞社、1999年）には本展示に関係する多くの興味深い事柄がもり込まれており、この展示内容をより深く理解する上で有用である。一読することをお勧めしたい。

【註】

- 1) 小林淳一「川原慶賀筆『人物画帳』」（ヨーゼフ・クライナー編著『黄昏のトクガワジャパン』日本放送出版協会、1998年、所収）
- 2) 「ドッガーバンク海戦図蒔絵額」55頁、「王侯人物像蒔絵螺鈿メダル」51頁。（『シーボルトと日本』朝日新聞社、1988年、所収）
- 3) 金井圓「中立国傭船期の日蘭貿易」、「寛政九年アメリカ傭船イライザ号初度の長崎来航」（『日蘭交渉史の研究』思文閣出版、1986年、所収）
- 4) 小林淳一『海を渡った生き人形——ペリー以前以後の日米交流——』60～62頁（朝日新聞社、1999年）。
- 5) 八百啓介『近世オランダ貿易と鎖国』（吉川弘文館、1998年）
- 6) 「動物おもちゃ」92頁、「果菜おもちゃ」93頁。（『シーボルト父子のみた日本』ドイツー日本研究所、1996年、所収）
- 7) 『ペリー来航関係史料図録』4頁。（横浜開港資料館、1982年）
- 8) 「木画薬籠（ガラス製薬瓶入）」88頁。（前掲『シーボルトと日本』所収）
- 9) 「黒漆塗螺鈿出島図木盆」124頁、274頁。（長崎市出島史跡整備審議会編『出島図』中央公論美

術出版、1987年、所収)

- 10) 「満次郎漂流記 全」(版本) 77頁。(『特別展 日米友好のかけ橋 ジョン万次郎』博物館明治村、1992年、所収)
- 11) 前掲『ペリー来航関係史料図録』7頁。
- 12) 小林淳一「1850年代における米国の絵入り新聞に見られる日本記事——ピーボディ・エセックス博物館所蔵の日本コレクションから——」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第4号、1999年、所収)
- 13) 和田萬吉訳『モンタヌス日本誌』「千佛殿」150頁。(丙午出版社、1925年)
- 14) 「たばこ入れ」54頁。(前掲『シーボルト父子のみた日本』所収)
- 15) 「生き人形 亭主・女房」30頁。(前掲『シーボルト父子のみた日本』所収)